神の母聖マリア　ルカ２：16～21　「未来」を語る大川小学校

　幼子イエスの誕生の話を羊飼いから聞いた「人びとは不思議に思いました」。神様の計画を理解できませんでした。母親のマリアも天使のお告げに「どうしてそのようなことがありましょうか？」と驚きました。マリア様にも強い動揺がありました。それでもマリア様は、分からないながらも「すべて心に納めて、思い巡らしました。」神様は、人間の思いを越えたことをなさる方という信仰がありました。

25日降誕祭のミサが終わってから中高生と福島にボランティアに行って来ました。1000年に一度と言われる震災を肌で感じて欲しい、と引率しました。「行かない」と、気の毒なことが遠くで起こったけどもう立ち直ってる、と思うかもしれません。でも「行くと」自分でも何かできるんじゃないか？　と意欲がわいてきます。

2019 年 12 月 28 日　宮城県石巻市立大川小学校で佐藤俊郎さんからお話を伺いました。(「小さな命の意味を考える」第 2 集からも記述しています。また一部表現を変えたり加筆しています)　大川小学校は、全長 567 メートルの北上川を渡す新北上大橋から土手を挟んで 200 メートルしか離れていないところにあります。

「随分寂しい場所に学校があるんですね」現地でよくそう言われます。周りに何も建物がなくて、石ころだらけの空き地に、ポツンと壊れた校舎があるだけ。「どうして何もないところに学校があるの？」と思う人もいます。でも、ここには、あの日まで周りに家もあって、子どもたちの笑顔が輝いてたんです。耳を澄ませば、子どもたちの元気な声が聞こえてきます。校庭で走り回って、一輪車で遊んで、お花見をしながら給食を食べてたんです。みんな大好きな大川小学校。私の娘、みずほ（あと一週間で卒業だった）も笑顔で通っていました。

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災の津波で大川小学校では全校 108 人中、74 名の児童が死亡・行方不明（4 名）となりました。今でも親は行方不明の子どもを土日・重機で探してます。教員も 10 名が亡くなっています。校庭にいた児童のうち、4 名だけが奇跡的に助かりました。学校が管理していて、このような犠牲を出したのは大川小学校以外にありません。　震度 6 の強い揺れが 3 分続いた後、大津波警報が発令されました。防災ラジオ、無線、市の広報車が盛んに避難を呼びかけました。校庭にいた子供たちもそれを聞いています。体育館裏の山は、緩やかな傾斜です。椎茸の栽培の学習もしていました。　迎えに来た保護者も「ラジオで津波が来ると言ってる。あの山に逃げて！」と進言していました。スクールバスも避難のために待機していました。「山に逃げっぺ」と訴える子もいました。逃げたあと、先生に校庭まで連れ戻された子もいました。・・・避難情報もあり、地震から津波が来るまで 51 分も時間がありました。手段（山まで逃げる）もあったのに救えなかった。「ここにいてはダメ！　逃げろ！」と強く言う先生がいませんでした。

時々「命って小さいですか？」と質問を受けます。命は、地球がちょっと身震いしただけで簡単になくなる小さなものです。でも、命の意味を考えるとどんなにも大きくて深い。これほど大切なものはない、と思い知らされてます。

大人になった愛娘に逢いたい、抱きしめたい。「行ってきます」の声は聞いたけど「ただいま」の声は聞いていない。会えたけど無言の娘。無言のままで成人式を迎えることになる。・・・
震災当日、翌日・・・我が子を探す作業は地獄でした。土砂の中から足が、手が、頭が・・・。顔についてた泥を取ってあげて、泣きながら我が子を抱きしめました。３０数人の子どもたちが並べられました。みんな娘と仲良しだったお友だちです。　親子で、友達同士で楽しく過ごした時間もあったのに・・・こんなことになって。どうして？　疑問と怒りは消えません。
辛く、厳しく、悲しい思いは薄れることはありません。心に突き刺さったまま年月は過ぎます。一生付き合っていかなければいけないと覚悟を決めています。それが、娘の親であり続けることだと感じています。

ボロボロになった大川小学校の校舎。震災遺構として遺すことになりました。これからの学校防災・防災教育のために学びに来ていただきたいですし、利用していただきたいです。でも、震災遺構は永遠には保存できません。いつかは崩れます。崩れても心の中にある大川小学校は永遠に崩れることはありません。娘と親の関係も永遠に続きます。命の大切さは、受け継がれなければいけません。

東日本大震災で、現代社会は宿題を突きつけられました。学校だけでなく、私たちの周りにある様々な概念、価値観、システムを見直す時でしょう。その宿題は、情報や物が氾濫する反面、多忙になって閉塞感が蔓延し、本質的な豊かさが失われていることです。日本の方向性にも影響を与えています。教育委員会は大人の利害とかメンツじゃなくて子どもたちの命を真ん中に置いて欲しい。誠意をもって向き合えば、はじめはかみ合わなくても必ず方向性は見えてくると私は信じています。

大川小学校の校歌には「未来を拓く」というタイトルがつけられています。大川小の悲劇は、命の大切さを再認識する始まりの場所です。亡くなった小さな命が「未来」のための大切な意味を持てた時、あの子たちがニコニコ笑って出迎えてくれる気がします。その「未来」に向けて辛い体験を語り続けています。

マリア様は、分からないながらも「すべて心に納めて、思い巡らしました。」　葛藤しているのは、マリア様だけではありません。神様の計画は、簡単にわかるものでもありません。小さな命の大切さも、私たちは分かっていないのかもしれません。「未来」に向けて信仰の希望を願って、新しい年を始めましょう。